慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	BCCWJに現れた複合動詞「押しつける」2 : 文学ジャンル
Sub Title	
Author	村田, 年(Murata, Minori)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2021
Jtitle	日本語と日本語教育 No.49 (2021. 3) ,p.55- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20210300-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』49：55–79（2021.3）

BCCWJに現れた複合動詞「押しつける」2

―文学ジャンル―

村　田　　年

1.　はじめに

村田（2020）では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて、後項動詞「つける」を持つ複合動詞について、三つのジャンル（自然科学系（含技術・工学）、社会科学、文学）における使用頻度調査から高頻度語群を抽出した。その中の高頻度語彙[1]「押しつける」の用法について、自然科学系（含技術・工学）と社会科学の二つのジャンルを対象に、三つの観点（①目的語となる名詞、②共起する副詞、③受身形）から分析を行った。その結果、BCCWJに現れた複合動詞「押しつける」はすべて語彙的複合動詞で、その意味用法は、物理的状態と威圧的状態の二つに大きく分けられ、ジャンルによってその使用傾向に違いがあることが明らかとなった。本稿では、三つ目の文学ジャンルに焦点を当て、村田（2020）と同じ方法で分析を行う。

2.　研究目的

本研究の目的は、文学ジャンルに現れた「押しつける」の全用例を対象に、村田（2020）と同様の方法で分析を行い、その使用傾向を明らかにすることである。また、その分析結果に基づき、指導方法の提案を行う。

3. 研究方法

村田（2020）と同様、「押しつける」の用法について、三つの観点（①目的語となる名詞はどのような名詞か、②共起する副詞にはどのようなものがあるか、③受身形で用いられるのはどのような場合か）から分析を行う。また、その結果を村田（2020）の結果と合わせて考察することで、「押しつける」が持つ意味の幅をより明確にし、それを記述する。

4. 調査対象

既に、村田（2020）の 22 後項動詞を対象とした調査結果[2]で見たように、複合動詞の使用頻度数については、自然科学系（含技術・工学）、社会科学、文学の三つのジャンルの中では、文学ジャンルが最も高い。また、後項動詞「つける」を含む複合動詞の総使用頻度数に占める割合でも、文学ジャンルが約 68％（11911/17528）と圧倒的に高いのに対して、社会学ジャンルは約 18％（3070/17528）、自然科学系（含技術・工学）は約 15％（2547/17528）というように、相対的に低い割合となっている。本稿では、三つのジャンルで抽出された「押しつける」の総数 1104 例のうち、文学ジャンルに現れた 758 例を対象に分析を行う。

5. 分析結果

最初に、すべての用例が語彙的複合動詞の用法で、統語的複合動詞の例がなかったことを報告する。以下では、3 で述べた方法に従って、①目的語となる名詞、②共起する副詞、③受身形で用いられる場合という三つの観点から、個々の用例を見ていく。

L-① 目的語となる名詞

文学ジャンルでは、目的語に具体物が来る例が非常に多かった。全用例 758 例のうち 570 例を占め、全体の約 75％が具体名詞に接続していた。残り 188 例が抽象名詞に接続する例で、具体名詞への接続例が、抽象名詞へ

の接続例の約 3 倍の割合となっていた。以下に、具体名詞に接続する例から 10 例を抜粋して挙げる（L：文学ジャンル）。

〈具体名詞〉

L1 ：うつぶせに、網棚に顔を押しつけて、俺を見下ろしていた。
L2 ：受話器を押しつけていた耳ばかりでなく、頭のなかまで〜。
L3 ：パーカーは両腕を広げ、配水管の側面に押しつけた。
L4 ：彼女は座席の隅に軀をおしつけて固く眼を閉じ、〜。
L5 ：彼女はみるからに重そうな膨れたトランクを船員におしつけた。
L6 ：係長はぐいぐいと煙草を灰皿に押しつけた。
L7 ：（警察犬が）足を止めて、鼻を地面に押しつけている。
L8 ：才蔵は、八雲の胸に顔を押し付けながら、いい知れぬ安らぎを覚えた。
L9 ：〜、壁に押しつけて並べられている植木鉢の低い台板の下から〜。
L10：青年はラエスリールの喉元に、短剣をさらに押しつけた。

570 例中 10 例のみではあるが、具体物を「押しつける」という設定では、村田（2020）で見てきたように、圧力を伴う物理的な接触を意味する例であることがわかる。また、上記の例では、目的語が身体あるいは身体の一部（L7 は犬の例）となっているものが 5 例（L1, L3, L4, L7, L8）あり、目的語だけでなく「押しつける」対象先までを含めると全部で 7 例となる。

次に、「押しつける」対象先は、通常、「〜を…に／へ（押しつける）」の形で明示されることが多い。以下では、目的語と対象先の組み合わせ例を 50 挙げる。なお、比較対照のため、出現の順をすべて「〜を…に／へ」の形で記す[3]。

顔を冷たいシーツに／顔を胸元に／ピストルを男の手に／たばこの火を頬に／顔を冷たい石に／腕を額に／私の顔を鼎中の水に／遠藤をカウンターに／千円札を山下の手に／ウィスキーを殺し屋の手に／マリファナ煙草を灰皿に／鋭い切っ先を掌のふっくらした部分に／掌の付け根を引き攣る口元に／体をシートの背もたれに／受話器を耳に／豚肉を鉄板に／頬を胸に／体を壁に／包みをおれに／顔を彼の胸元に／顔を格子に／体をパトカーの床に／ハンカチを顔に／涙で濡れた頬をわが子の顔に／枕を耳に／自分の唇を白川の唇に／その顔をぼくのひざに／唇を僕の手の甲に／銃口を脇腹へ／手をガラスに／封筒を御子に／目を潜望鏡のハウジングに／銃口を腰のあたりに／顔を彼の体に／紙をウィールドの手に／女を壁に／小柄な体をマストに／弟を門に／楽器を口に／その濡れた唇を窓ガラスに／なにかをドアの基底部に／かなりの額のチップをラヘルの手に／鼻を白川の顎に／口をマスクに／額を窓に／ビール壜を頬に／ショットガンの銃口を彼女の肩に／小銭を女中の手に／顔を顕微鏡に／通帳をおれに

上記の「～を…に／へ」の例を見ると、目的語に具体名詞を取る場合は、「押しつける」対象先も具体名詞となっていて、具体的な物を具体的な場所に圧力を伴って接触させるという意味を表している。上記の 50 例を見ると、「押しつける」対象先が身体あるいは身体の一部となっている例が 30 例ある。目的語だけでなく対象先としても「顔、頬、口、唇、胸、喉元、手、肩、ひざ」などの身体部分が非常に多いことがわかる。

この観点から、具体的に身体あるいは身体の一部が目的語あるいは対象先になっている例、すなわち、「～を…に／へ押しつける」の形で、物理的に身体あるいは身体の一部が「を」あるいは「に／へ」で現れている例を調べると、524 例あることがわかった。つまり、「押しつける」の使用総数 758 例のうち、目的語として具体名詞を取る例が 570 例あり、そのうち 524 例が身体あるいは身体の一部を、目的語か対象先にしているということである。これは、全体数の約 69％に当たり、目的語に具体名詞を取った例だけで考えれば、その約 92％に相当する。言い換えれば、文学ジャンルに現れた「押しつける」の例は、その大半が身体の物理的接触に用いられているということになる。

次に、目的語が抽象名詞[4]の例について見ていく。

〈抽象名詞〉

L11：天皇制といういわゆる〈国体の精華〉を国民に押しつけ、～。

L12：「えらそうに！恩を押しつけて、女がついてくると思ってるの？」

L13：岩森が自分の思った通りのやり方で仕事を進めるために部下たちにある水準を押しつけたのである。

L14：アレクサンダーは、征服者側の諸制度を、占領地に押しつけなかった。

L15：『君はいろんな問題を全部痛みに押しつけているんだ。愚痴ばかり言っても仕方ないだろう。』

L16：「俺だってさんざん俺の都合をお前に押しつけたことがある。」

L17：自分の悲歎や心境を単に無技巧に押しつけようとしても、読者はついてくるものではない。

L18：～余りに衝撃的な言葉を、別れ際に七緒に押しつけたのである。

L19：何でもかんでも学校に押し付けるだけ押し付けて！

L20：不合理な状況に意志の力によって論理を押しつけたいとは。

目的語が抽象名詞の 188 例中の任意の 10 例ではあるが、この 10 例を見ると、「押しつける」対象先が「人」の場合は 6 例ある（L11～L13, L16～L18）。ここで L14 と L19 の対象先について見ると、L14 の対象先「占領地」は、場所を表す語であるが、文脈からは占領地に住んでいる人々を指していることがわかる。L19 も同様で、この「学校」は、建物本体ではなく「学校」という組織に属す人々の集合体を指していることは明らかである。したがって、このように明示的に人を指していなくても、文脈から人の集合体だと考えられる例は、先の 6 例と同様に、対象先は「人」だと捉えることができよう。このような例はほかにも以下のような例があった。

L21：本来ならこれらの肉や魚、野菜は、すべて廃棄処分にしなければならないのが、事故を起こした、大ロシア共和国のとるべき処置なのですが、すべて近隣諸国に押しつけ、～。

L22：前年の売上などクリアできるはずもない不況の中で、それは上司たちが勝手に決めて売場に押しつけた法外な予算であった。

「押しつける」対象先が「人」の場合（L11～14, L16～19）には、村田（2020）でも見たように、意味的に、「押しつける側が対象先の相手を威圧し、押しつけられる側は意思に反してそれを受けいれざるを得ないという心理的抵抗を伴う状態（威圧的状態）」になると理解される。一方、L15、L20 の例のように、「押しつける」対象先が、人ではなく抽象的な「もの」の場合（L15「痛み」，L20「論理」）には、具体物同士の場合と同様、「力を伴う物理的接触」がイメージされるだけで、威圧感や抵抗感という意味にはつながっていない。

次に、上記の 12 例（L11～L22）を、押しつける側の人間の態度という視点から見直してみよう。自分以外の「人」や「もの」に対して、無理に「押しつける」という行為は、本来、自分が果たすべき責任から逃れる行為と理解でき、責任放棄、責任転嫁の意味につながると考えられる。例えば、L15 では「君」に当たる人間がいろんな問題を「痛み」のせいにしていると非難を受けていて、それは「君」が自分の責任にきちんと向き合っていないことを意味している。このように「押しつける」は、相手に威圧

感を与えると同時に、それが行為者の責任回避行動にもつながっているという点は、「押しつける」の意味の理解には重要だと言えよう。

ここで、目的語が抽象名詞の場合に用いられた「～を…に／へ（押しつける）」の組み合わせ例を挙げる。抽象名詞の使用例は、具体名詞の 3 分の 1 程度なので、その数に比例させ、20 の例を挙げる。なお、比較対照のため、出現の順はすべて「～を…に／へ」の形とし、文中で対象先が明示されていない例では（　）で対象先を補った。

潔癖さを天皇家に／そんな雑事を木谷に／極度の貧困を（ナナに）／カソリックをスペイン人に／大きな難題を馬子に／作戦を我々に／訳の分からない役職をカルマ―に／無理難題を俺に／アラビア語を被征服者に／すべての背任を下田に／質素な生活を周囲の人間に／片づけをとん子に／自分の野望を子孫に／山ほどの仕事を彼女に／結婚を（ピラーに）／別れのつらさを私に／汚い役回りをぼくに／船の損害の責任を船頭に／ケイトから聞いた話を彼に／斬罪を河合耆三郎に

上記の 20 例は無作為に選んだものだが、その明示された対象先はすべて人で、先の 10 例と同様、対象先に人が来る場合が非常に多いことがわかる。抽象名詞を目的語に取る 188 例から上記の 30 例を除いた 158 例を個別に見ても、同様の分析が可能な例がほとんどであった。対象先が明示されていない例でも、文脈から、対象先が人だと判断できる例が多かった。

以上、分析方法の一つとして、具体名詞か抽象名詞かを基準として分析を行ったが、「仕事」、「話」のように、具体的か抽象的かが必ずしも明確とは言えない名詞もあり、実際には分類に迷う例もあった。

そのほか、「押しつける」先が不明な例として、以下の例があった。

L23：これらの眼まぐるしい活動は、圧しつけられたような静かさのなかで然も極めて忍びやかに繰り返されている。

L24：私は～。空気はソヨとも動かず、異様に息苦しく、押しつけられるような気持だ。

L23 は、用字も「圧しつける」であり、「静かさ」が圧迫感のある重い静寂であることを比況の助動詞「ようだ」を用いて表しているが、何が何に圧しつけられるかは不明である。L24 は、文脈から「押しつけられる」のが「私」であることはわかるが、どこに押しつけられるかは不明である。

次に、「押しつける」対象先を示す格助詞「に」と「へ」の使用について見ていく。「へ」の使用は、758 例中 19 例のみで、全体の約 2.5％であった。以下にそのうちの 10 例を挙げる。

L25：～もう一人のほうが、役人の頭ほどもあるこぶしを彼の口もとへ押しつけて、「さあ、声をたてるなら立ててみろっ！」と、いったのである。

L26：～カプセルが射出されるとおれは後方へ圧しつけられて足の骨を折りそうになった。

L27：（十六、三十五の采粒かの、はい、ございます。）と隅の壁へ押着けた、薬箪笥の古びたやうな抽斗を開けると、～。

L28：だしぬけに彼女が椅子から立ちあがり、おれの急所急所へ体をおしつけてきた～。

L29：原田は FAX の用紙が丸まりそうになるのを、せっせと伸しながら机へ押し付けて読んだ。

L30：～細君ははさみを顔へ押しつけたまま、「じつにきれいですこと、裸体の美人ですね。」と言って、なかなかはなさない。

L31：おくにの顔が佐助の顔をおおい、やわらかな、熱い唇が佐助のそれへ押しつけられた。

L32：男に、銃口をわき腹へ押しつけられて、さりげなく歩けと言われても無理な話である。

L33：司は冷たく言い放つと、短くなったタバコを灰皿へ押しつける。

L34：（アルファ・ロメオが）グン、と加速したときのパワーたるや、まどかをシートへ押しつけるほどで、～。

「へ」の持つ方向性の意味は、L26「おれは後方へ圧しつけられて」、L34「（加速時のパワーが人を）シートへ押しつけるほどで」の例によく表れていると言えるが、「へ」の使用は、「に」に比べて非常に少なかった。その理由としては、そもそも「押しつける」の後項動詞「つける」が、その接着先・密着先を「に」で表し、通常「～を…につける」の構文で使われることから、「押しつける」の場合にも、その構文が影響を与えていると考えられる。

L-②　共起する副詞

文学ジャンルでは、「押しつける」の使用頻度が高いことから、必然的に共起する副詞の使用例も多かった。以下に、「押しつける」と共起していた副詞を挙げる（2 回以上出現した副詞は（　）内に回数を示す）。なお、表記については、漢字、カタカナ、平仮名の場合にも同じ語と同定して扱った。

一方的に、うまく（2）、重く、重苦しく、固く、軽く 2、ガチャンガチャンと、がりがり

と、ガンガンと、きつく（3）、ぎゅうと、ギュッと（5）、ギューッと、ぐいと（2）、ぐいぐい（と）（9）、ぐいッと、ぐりぐり（と）（2）、強引に（4）、ゴリっと、しきりに、しっかり（と）（4）、じゃりじゃりと、じゅうと、そっと、ダンッと、チューッと、強く（14）、ぴったり（と）（10）、不意に、ベッタリと、ポンと、ムニュッと、むちゃくちゃに、無理やり（に）（6）、むりに、無技巧に、柔らかに、乱暴に（2）、楽々と、ゆるく、高飛車に、親しげに、思いきって、いきなり（2）、唐突に、にわかに、またたく間に、体裁よく、必死に、だしぬけに、いっつも、挑発的に、さんざん、何回も、みんな、すべて（3）、全部（2）

上記の副詞群について、村田（2020）で行った自然科学系（含技術・工学）ジャンルと社会科学ジャンルにおける副詞の意味分類を踏まえ、以下のように再分類を行った。

A. 行為の物理的状態

①擬音語

ゴリっと、じゅうと、ダンッと、チューッと、ポンと、ガチャンガチャンと、がりがりと、じゃりじゃりと

②擬態語

ぎゅうと、ギュッと（5）、ギューッと、ぐいと（2）、ぐいッと、ムニュッと、ガンガンと、ぐいぐい（と）（9）、ぐりぐり（と）（2）

③強さ

重く、軽く、強く（14）、固く、きつく（3）、柔らかに、ゆるく

④密着度

しっかり（と）（4）、ぴったり（と）（10）、ベッタリと

B. 行為に対する評価

①行為者の態度

一方的に、強引に（4）、無理やり（に）（6）、重苦しく、むりに、むちゃくちゃに、無技巧に、乱暴に（2）、そっと、高飛車に、挑発的に、うまく、楽々と、親しげに、体裁よく、思いきって、必死に

②行為時点

いきなり（2）、唐突に、にわかに、不意に、だしぬけに、またたく間に

C. 行為の程度の強化

①頻度

しきりに、いっつも、さんざん、何回も

②全面性

みんな、すべて（3）、全部（2）

A は、使用頻度が最も高いグループで、「押しつける」という接触行為の

物理的な状態を描写する副詞群である。特徴的なのは、①擬音語と②擬態語の多さで、どのように押しつけるかということを具体的にイメージするのに役立っている。例えば、「じゅうと」豚肉が鉄板で焼ける音、「ダンッと」両手が床に押しつけられる音、「ギュッと」体がドアのガラスに押しつけられる様子、「ぐいぐいと」顔を枕に押しつけていく様子などである。③は、「押しつけ方」の強さの程度を表す副詞群である。これは、「押しつける」の前項動詞「押す」という行為との関係性が強く感じられる語群で、「強く、軽く、きつく、ゆるく」などがある。④は、③とは逆に、後項動詞「つける」という行為との関係性がより強く意識される語群で、密着の度合いを「しっかりと、ぴったりと」というように表している。「べったりと」は④に入れているが、②の擬態語でもある。

B は、「行為に対する評価」の副詞としてまとめたグループである。①「行為者の態度」は、「押しつける」という行為を行為者がどのような態度で行ったかを表す副詞群である。これらの副詞を見ると、副詞自体の意味に既に評価が含まれているものが多く、否定的なものが多いことがわかる。この副詞群には、「うまく、楽々と、親しげに、体裁よく」など、一見肯定的な意味に見える副詞も含まれているが、個別の副詞を文脈から見ていくと、以下のように、否定的な意味で用いられていることがわかる。

L35：（制作を）～知り合いにうまく押しつけようにも、今回はそれがうまくいかなかった。

L36：久留米は片手で楽々とその身体をドアに押しつけ、銜えていた煙草を玄関に吐き捨てた。「頼む…頼むよ―わ、わかったよ。おれが悪かったんだ。もうしない。～…だ、だから放してくれよ！」

L37：彼女の両腕はケイルの首にまわされ、ほっそりとしているが豊かな曲線に包まれた身体が親しげに押しつけられてくる。

L38：梶原は鎌倉どのの面倒見を体裁よく押しつけられることで、～

このほか、「思いきって、必死に」のような副詞には、副詞自体に否定的な意味はないが、行為者が力を込めて実行したということであり、それは逆に「押しつける」という行為が容易ではなく、行為者に負荷がかかることを表していると言えよう。

②「行為時点」としてまとめた副詞群は、「押しつける」という行為のタイミングについて、意外性や驚きを付加する働きをしていると考えられる。特に「いきなり、唐突に、不意に、だしぬけに」などは、想定しない時点に突然、その行為が行われたことに対して否定的な捉え方をしていると考えられる。

このように、B グループの副詞群は、その大半が否定的な意味を持ち、「押しつける」という行為によって、相手に心理的抵抗を感じさせる威圧状態を副詞がさらに強めていると考えられる。

C は、「行為の程度の強化」としてまとめた副詞群である。「押しつける」という行為を、何度も繰り返す、あるいは、その行為の影響が及ぶ範囲が全面的であるということによって、「押しつける」行為の程度の強さを表している。①「頻度」は行為の反復によって、②「全面性」は行為の範囲が及ぶ大きさによって、行為の程度が強化されると考えられる。

C グループの副詞の働きについては、既に村田（2020）の社会科学ジャンルの分析でも見られたもので、「すべて」、「全面的に」というような行為の範囲の全面性を表す副詞が共起することによって、「押しつける」という行為の程度が最高レベルであることが強調されていた。今回、文学ジャンルにおける分析結果が加わったことによって、C の副詞群の働きがより明確になったと言える。

上記の副詞以外にも、同様の機能を担った副詞句、副詞相当句が見られた。それらを上記の分類に基づいて分類し、以下に挙げる。

B　行為の評価

①行為者の態度：いやも応もなく、力一杯、力任せに、力づくで、山のように、痛いほど、いやというほど、有無を言わせず

②行為時点：いつのまにか、考える間もなく

C　行為の程度の強化

①頻度：ひっきりなしに

②全面性：何もかも

L-③　受身形

形態の観点から見て、態が変換し、「押しつけられる」の形で使用された例は、758 例中 156 例であった。そのうち 2 例は可能形で[5]、それ以外の 154 例が受身形であった。つまり、受身形使用は、全体の約 20％（154/758）ということになる。この割合は、村田（2020）で分析した自然科学系（含技術・工学）の約 19％（16/86）とほぼ同様で、社会科学ジャンルの約 24％（62/260）に比べると少なかった。

受身形は、「（目的語）が（対象先）に／へ押しつけられる」の形をとるので、目的語と対象先の組み合わせは、「ものがものに／ものが人に／人がものに／人が人に」という 4 類型となる。以下では、紙幅の許す範囲で実例をできるだけ多く提示しながら、類型ごとにその使用環境と意味を検討していく[6]（LP は「文学ジャンル受身形の意。波線は「押しつけられる」にかかる副詞・副詞句）。

類型 1：（もの）が（もの）に／へ押しつけられる

LP1：考えも、数のきまった詩の脚の上に押しつけられると、いっそうはげしくとび出してきて、～。

LP2：今日は一度も鈴の音を聞いてはいなかった。　最初は、抱き抱えた手習いの風呂敷に押しつけられて、それで鳴らないのかと思っていたが、

LP3：～横断幕はたたまれて生け垣に押しつけられた。

LP4：～、ぎしぎしと悲鳴を上げる船体が岩礁の段差に押しつけられると、飛散した岩盤の破片や土砂が一斉に襲いかかってくる。

LP5：残りの三つの机は、いずれも道路に面した窓際に押しつけられている。

類型 1 は、4 類型の中で最も例が少なかった。LP1 以外の 4 例は、目的語が具体名詞で、具体的な場面の描写である。いずれの例も受身形になっていることで、「だれが／何が押しつけたか」より「押しつけられたもの」に焦点があり、「もの」同士の物理的接触を意味している。

類型 2：（もの）が（人／人体）に／へ押しつけられる

類型 2 は、4 類型中最も用例数が多かったグループである。ここで、「（人／人体）」というのは、人自身（人の体全体）あるいは体の一部を意

味する。用例数が多いので、目的語が具体名詞の場合と抽象名詞の場合に分けて見ていく。

〈目的語が具体名詞の例〉

LP6 ：中年のやぼったい安物の背広を着た男の手に握られたピストルが、いつのまにか押しつけられていたのである。

LP7 ：銃口が脇腹へ押しつけられたのを、三之助は、軽く払いのけながら、～。

LP8 ：腰のあたりに銃口が押しつけられるのがわかった。

LP9 ：ごりっ、鉄のイヤな感覚が背骨を刺激した。「？！」筒状の物体が押しつけられている。拳銃だ。

LP10：俺の脇腹に、弟分の構えた銃がぴったり押しつけられている。

LP11：片山がその男の方へかがみ込むと、何やら、固いものがグイと腹へ押しつけられて来た。

LP12：「とりあえず、病院へ」と答えた後頭部に、冷たい銃口が押しつけられた。

LP13：と、いきなり眉間に堅いものがぐいッと押しつけられた。

LP14：短剣は腹部を離れ、ブロンの喉笛にそっと押しつけられた。

LP15：～彼は真っ赤に焼けた鉄の焼き印を頬に押しつけられた気がした。

LP16：体は打ち砕かれ、時には煙草の火を全身に押しつけられていた。

LP17：アマは、～、タバコを押しつけられた痕も無数にあった。

LP18：頭の横に携帯式ガスバーナーの炎を押し付けられたような痛みが走ったが、～。

LP19：思わず転倒したノド元に松葉杖の尖端がギュッと押しつけられた。

LP20：灰色のこぶしがこめかみに押しつけられた。

LP21：ベルトの角張ったバックルが脚に押しつけられたかと思うと、体が引き裂かれるような痛みが走った。

LP22：にわかに臓物の奥にある肝に氷塊を押しつけられた寒さに襲われ、得体の知れない脅えが体の中を走り抜ける。

LP23：～ビールのチェイサーが、むりやり押しつけられた。

LP24：信子と春樹に千円ずつお小遣いをくれた。信子は最初、いらないと言ったが、押しつけられた。

LP25：無数の新聞、雑誌や書籍といった洗脳の道具が収容所に持ち込まれ、こんな物はなんの腹の足しにも、薬の代わりにもならないと考えている捕虜たちに押し付けられた。

LP26：～シベリア行きの片道切符を押しつけられる心配がないという事実は認めざるをえない。

LP27：下らない反戦コンサートだかの切符を山のように押しつけられて、～。

LP28：～芝居のビラを押しつけられるのではないかと考えていた。

LP29：入坑する前にぼくは石油ランプを手に押しつけられるようにしてもらった。

LP30：～、軍帽をいやというほど前や後に滑り落ちるくらいに押しつけられる。

LP31：まるでやわらかなマクラを押しつけられているみたい…～。

LP32：ミミは少し抜けているところがあるので、変な荷物を押しつけられることも考えられるが、～。

類型 2 で、目的語が具体名詞の場合、LP6 から LP13 のように、目的語が銃の例が最も多かった。文学ジャンルというジャンルの性質もあると思うが、「銃（銃口）が人（人体の一部）に押しつけられる」の形でよく使われている。また、LP14 から LP21 では、銃ではないが、明らかに人に危害を加えられる武器相当のものとして、「短剣、鉄の焼き印、煙草の火、ガスバーナーの炎、松葉杖の尖端、角張ったバックル、こぶし」が目的語となっている。このように名詞自体が人に脅威を与える具体物が多い。

一方、否定的意味合いを持たない名詞が目的語となる場合は、文中の否定的表現がそれを補っているようである。LP23（チェイサー）、LP27（切符）、LP30（軍帽）の場合には、それぞれ「むりやり」、「山のように」、「いやというほど」というように、否定的意味を持つ副詞・副詞句によって強い威圧感が示されている。LP22 では、人の恐怖と不安という否定的感情が「臓物の奥にある肝に氷塊を押しつけられた寒さ」という比況表現で表されている。LP24 の「お小遣い」の場合には、「信子は、最初、いらないと言ったが」というように、小遣いの受け取りを拒否したという否定的な事実が文の接続部で説明されている。さらに、LP32 の「荷物」は、「変な」という否定的意味を持つ形容詞が付加することで、心理的抵抗を表している。

このように、受身形は被害の意味を表すことができるが、実際の例を個別に見ると、何がどのように「押しつけられる」かを、名詞、副詞・副詞句、形容詞などが補強する形で、威圧感や心理的抵抗が強調されていることがわかった。

次に、目的語が抽象名詞の例を見ていく。

〈目的語が抽象名詞の例〉

LP33：黒人奴隷たちはポルトガル人によってキリスト教を押しつけられたんですが、～。

LP34：スペイン人に押しつけられたカソリックをかたちでは装っているが、インディオの信仰は、インディオだけのものだった。

LP35：和人に押しつけられる仏教よりは心地よかった。

LP36：昨夜、廐戸は馬子に大きな難題を二つ押しつけられたのだ。

LP37：～仕事以上に無理難題を押しつけられる可能性が強いというわけである。

LP38：わたしの場合、もうひとり、強力な後見人がいるから、神殿に無理難題を押しつけられることはないんですけど、～。

LP39：ただ、うちのキオは先輩たちがリタイアしちゃって、難題を押しつけられた可哀相な立場なんです。

LP40：しかも、巡検使などという、訳の分からない役職を押し付けられてだ。

LP41：ひょんなことから PTA の役員をおおせつかり、またたく間に副会長の役を押しつけられてしまった。

LP42：柳生も因果な役目ばかり押し付けられる。

LP43：もう怒りはなく、押し付けられた役目を粛々とこなそうと、～。

LP44：船頭は、船の損害の責任を押しつけられるかもしれないと怯えて、～。

LP45：～当局の動きを見極め、必ずや彼らに責任を押しつけられると確信できてから、～。

LP46：他の新聞社は、総会屋の逃亡劇をスクープしていたが、聖一郎の新聞社だけは乗り遅れ、その責任がすべて聖一郎の肩に押しつけられた。

LP47：～山ほどの仕事を押しつけられるのに甘んじる。

LP48：しかし、カーフィールドはこれらの徴候を誤解して、能力以上の仕事を押しつけられて困惑しているのだろう、～。

LP49：労働法などという、押しつけられた土産法がある。

LP50：～占領軍から押しつけられた欠陥憲法であると決めつけている。

LP51：この地に来た今川氏真は、その日から不自由ずくめの生活をおしつけられた。

LP52：「～ご自分はいくらでも質素な暮しをすりゃいいわ。でも、周囲の人間にまで押し付けられちゃ、かなわないわよ」

LP53：アメリカから押しつけられた戦後教育が、～

LP54：昼食を犠牲にして検視解剖に立ち会ってきたというのに、押しつけられるいわれのない不愉快な義務をこなしてきたというのに、～。

LP55：このような危険性は、自ら進んで課した訓練の場合よりも、社会通念によって押しつけられた訓練の場合により多くみられます。

LP56：もっとも、彼女らにとっては、性的役割分担や性の放縦を、当時学生運動をしていた男子学生から押しつけられた屈辱が、～。

LP57：～、そういう意識の中でもなお、押しつけられた結果のような結婚には、気持がなじんでいかなかった。

LP58：戦死した夫たちにとっては、軍国主義によって、天皇のため、国のために死ぬのだという大義を押しつけられた。

LP59：明治天皇が病気になって、国民に自粛が押しつけられたとき、～

LP60：～毛利家も幕府から松平姓を押しつけられていた。

LP61：洋海は田丸から今夜の泊まり当番を押し付けられて、～。

LP62：～陶子は胸に重いものを押しつけられたような息苦しさを感じた。

LP63：～ああいう融通の利かないマジメ人間だから、こんな面倒ばかり押しつけられて、成果はみんな別の人に行っちゃうのだ。

LP64：それが心からの思いやりでも、他人の意志を無理矢理に押しつけられたと感じるような女なのだ。

LP65：施設側の思いやりを押しつけられ、己のここまでの生き方を懺悔させられようものなら、彼の全人生が否定されてしまう。

LP66：「しからば、二十四日、早々に打立て」「はっ。…かしこまりました」　いやも応もなく、押しつけられてしまった。

LP67：押しつけられる予算をことごとくクリアしていかなければ、～。

LP68：～ケイトに押しつけられた無情なおきてを忘れようとしている男、～。

LP69：そんな独断を押しつけられるのは真っ平ごめんである。

目的語となっているのは、LP33 から LP35 は「宗教」、LP36 から LP39 は「（無理）難題」、LP40 から LP43 は「役目（役、役職）」、LP44 から LP46 は「責任」、LP47 と LP48 は「仕事」、LP49 と LP50 は「法（土産法、欠陥憲法）」、LP51 と LP52 は「生活（暮し）」である。そのほかには、「戦後教育、義務、屈辱、大義、自粛、当番、面倒、予算、独断）」などがある。

既に目的語が具体名詞の場合に見てきたように、抽象名詞の場合も、名詞それ自体から否定的意味合いが推測できるものとできないものがあった。

前者の否定的意味合いを推測できる名詞としては、「無理難題、責任、義務、屈辱、大義、おきて、自粛、独断」などが挙げられよう。この延長には「土産法（L49）」や「欠陥憲法（LP50」のように否定的意味が付加された名詞も含まれると考えられる。後者の否定的な意味を推測できない名詞の場合には、形容詞や副詞などが否定的意味合いを補強している。例えば、LP47 と LP48 の「仕事」は、「山ほどの仕事」、「能力以上の仕事」という名詞句で捉えると負担の大きさが感じられる。LP40、LP41、LP43 の「役目（役、役職）」では、「訳の分からない役職」、「副会長の役」、「因果な役目」、LP51 と LP52 の「生活（暮し）」では、「不自由ずくめの生活」、「質素な暮し」というように名詞の修飾部分が否定的意味を担っている。LP64 では、「他人の意志」で、「自分の意志ではない」ことから否定的意味合いを持ち、さらに、副詞「無理矢理に」によって心理的抵抗の程度が非常に

高いことが示されている。このほか、LP33、LP34 では、名詞「宗教」には否定的意味合いはないが、「宗教が人に押しつけられた」という歴史的事実や、現代社会においてはそれが人の権利の侵害に当たることなど、背景知識の援用で否定的意味合いが強調される例もある。

なお、名詞自体が否定的意味合いを持っている場合でも、修飾部分によって更に負の意味合いを強くできることは言うまでもない。例えば、LP36 では、「難題」に「大きな」が付加した上に、難題の数が「二つ」に増え、負担が増すことで行為が強化されている。また、LP54 では形容詞「不愉快な」が「義務」に、LP68 では形容詞「無情な」が「おきて」にそれぞれ付くことで、否定的意味合いが増し、心理的抵抗感を高めていると言えよう。

以上、類型 2 では、「ものが人に押しつけられる」という構文で、押しつけられた人の威圧感や心理的負担が強く表現される例が多かったが、その強さは、目的語となる名詞の性質以外に、否定的意味を持つ形容詞や副詞・副詞句などによって、その負担感がより一層強調されているのがわかった。

類型 3：（人／人体）が（もの）に／へ押しつけられる

LP70：片山は、ねじれた格好のまま、扉のガラスにギュッと押しつけられ、～。

LP71：遠藤のほうはまだ勘弁してもらえず、カウンターに押しつけられるようにして、五杯目のダブルを飲まされていた。

LP72： ナテイルは壁に押しつけられ、もはや頭と爪先しか動かせない。

LP73：伊吹は煤だらけの窓わくに圧しつけられそうになった。

LP74：手を振りほどこうとして、かえって鏡張りの壁に押しつけられた。

LP75：気がつくとアレンは、力強い腕で壁に押しつけられていた。

LP76：今もまだリチャードにドアに押しつけられ、彼の肌の刺激的な香りに体内をかきみだされているような気がした。

LP77：最初は抵抗していたお駒も、やがてブナの幹に押しつけられて、～。

LP78：そしてフロントガラスに押しつけられたハンフリーズの顔を見た。

LP79：～髪を摑まれ、スタンドの裸電球に顔を押しつけられ、～。

LP80：芦川と亘は、あばら骨がぽきんと鳴るほど強くおっぺされ、ほっぺたが地面に押しつけられた。

LP81：マットに押しつけられた顔をまげて自分の上に乗っている者を見た。
LP82：～金網にぴったりと押しつけられた顔があったのだ。
LP83：唐突に窓の内側に女の顔面が押しつけられた。
LP84：顔が泥だらけのマットに押しつけられている。
LP85：意識が戻ったときは車のマットに顔を押しつけられ、～
LP86：コルドの頭は、ヒカイの手で乱暴に床に押しつけられた。
LP87：腕をすっかり土堤の中へ突っこんでいるので、自然頭が横向けに土堤の草に押しつけられ、～。
LP88：～機体に衝撃が走った。頭が脊椎の上端に押しつけられ、ローターがわたしたちのあとを追うようにして、回転しながら落ちてきた。
LP89：～座席に押しつけられているお尻や太股に滲んだ汗が浸みつき、～
LP90：床に押し付けられた手首が少し痛いけど、～。

類型 3 は、用例数が類型 1 よりは多いものの、類型 2 と類型 4 に比べると少なかった。どの用例も、押し付けられる対象先が具体的な場所を示し、具体的な力を伴う物理的接触場面の描写となっている。上記 21 例の中で、目的語が人自身（人の体全体）の例は 8 例（LP70～LP77）で、体の一部は 13 例あり、そのうち 11 例は頭部であった。内訳は、顔 8 例 (LP78～LP85）と頭 3 例 (LP86～LP88[7]）である。このように、「（人／人体）が（もの）に押しつけられる」場合、人の体全体あるいは頭部がその大半を占めていることがわかった。

物理的に人を「押しつける」という行為は、相手に肉体的、精神的圧力を加え、相手を威圧する行為である。その場合、人体のどの部分を「押しつける」のが最も威圧的かと考えると、それは全身あるいは頭部ということになろう。なぜなら、人間にとって全身の自由が利かない、あるいは顔を含む頭部を床や地面に「押しつけられる」ことは、大きな屈辱感、敗北感につながると考えられるからである。つまり、「押しつける」という威圧行為が最も強調されるのは、人の全身あるいは頭部の自由を奪う場合だと言えよう。

このほか、以下の 2 例は同じ作品からの例で、ガラスにへばりついたヤモリを描写したものである。ヤモリの腹部は人体ではないが、体の一部と

いうことで、類型 3 に属すると考えられる。

LP91 ：硝子に押しつけられると、腹部にもおそらく粘着力のあるざらついた斑点がひとつあるのがわかる。

LP92 ：照明された硝子に押しつけられた腹部は X 線で見るように透き通っている。

類型 4：（人／人体）が（人／人体）に／へ押しつけられる

LP93 ：ゴットンの顔はキャラの胸に押しつけられ、窒息しそうになった。

LP94 ：キスをしたといっても、抱きつかれて顔を押しつけられたとき、唇が触れあっただけであり、～

LP95 ：若者を優しく抱いた手はほっそりした背中に押しつけられている。

LP96 ：邦夫の胸の中に抱かれるように押しつけられたことがあった。

LP97 ：光子の痣のある半面は、邦夫のシャツの胸にぴったりと押しつけられ、～。

LP98 ：～柔らかく熱い唇を押しつけられた。

LP99 ：右腕は、脇腹に押しつけられ、動かすことができなくなった。

LP100：背中に押しつけられた胸の感触が、急にリアルに感じられてきた。

LP101：乳房がインゲの脇腹に押しつけられるだろう。

LP102：女の背中が男の胸に押しつけられることになる。

LP103：～考える間もなく、温かい湿ったものが頬に押しつけられた。舌だ。

LP104：女と私が次第に押しつけられる様になって来た。

LP105：まるで胸に押しつけられた手のせいでどういうわけか心臓が打つのをやめたか、～。

LP106：見知らぬフランス人たちに体を押しつけられ、彼らの腕や背中の曲線を感じ、～。

LP107：思いきり引き寄せられ、ジョエルはレオの体に押しつけられる格好となった。

LP108：信介は押しつけられる女のやわらかな体を、少しうっとうしいものに感じながら、人混みの間を歩いていった。

LP109：ミュウのおなかの少し上のあたりにすみれの乳房が押しつけられた。

LP110：軀ごとおしつけられて、久木がソファーによろめくと、～。

LP111：～美雪の伝説の D カップバストが、「ムニュッ」と押しつけられた。

LP112：ひとりひとりに抱えられた胸に押しつけられながら、長い列を父親たちの手につぎつぎに渡され、安全なところへと運ばれていくのを夢みた。

LP113：しかしすぐに、自分にぴったりと押しつけられているやわらかな女性の体の感触は、あまりに真に迫っていると気がついた。

LP114：ジョアンナをぐいと引き寄せた。押しつけられた唇は、怒りと苦渋に満ちていた。

LP115：マックスの胸がカーラの背中に押しつけられた。

LP116：暗闇の中で押しつけられた唇の一瞬の感触だけだ。

LP117：だしぬけにアーダの小さい柔らかい手が彼の手に押しつけられるのを、彼は感じた。

LP118：ぐいっと物凄い力で、俺はその両手をそれぞれの手に取られ、ダンッと床に押し付けられてしまった。

LP119：ぐっと聡明の腰を押しつけられると、俺の腿に～。

LP120：彼の力強い体に押しつけられている間、彼女の意識は非現実的な空間をさまよっていた。

LP121：でもわたしは違う。あの人を押しつけられたんだもの。
LP122：やっかいなやつを押しつけられた。
LP123：～やくざめいた獣を押し付けられるとは、思いも寄らなかった。
LP124：押しつけられた形で新入りの香菜子があてがわれたのだが、不思議なことに木村は香菜子をひどく気に入った。
LP125：「～軽皇子から孕んだ嬪を押しつけられて孀とし、生まれた赤子を大事に育てておるそうじゃ」

類型 4「（人／人体）が（人／人体）に／へ押しつけられる」は、類型 2 に次いで用例が多かったグループである。類型 4 は意味的に大きく二つに分けられると考えられる。

一つは、身体（身体の一部）と身体（身体の一部）の物理的接触（LP93～LP120）を意味し、用例の大半がこの意味で用いられていた。力を伴う肉体的接触を表すことから、ここには多くの性描写が含まれている。「押しつけられる」の副詞として、密着度を表す「ぴったりと (LP97, LP113)」、擬態語「ムニュッと (LP111)」、「ダンッと (LP118)」、「ぐっと (LP119)」以外に、否定的な行為の時点としては、「考える間もなく (LP103)」、「だしぬけに (LP117)」が用いられているのがわかる。もう一つは抽象的な意味で、ある一人の人間が他の人間に「押しつけられる」状態を表し、本来、面倒を見るはずの人間がその役割を果たさずに他の人間に「押しつけた」せいで、代わりの人が面倒を見させられる事態になったことを意味している（LP120～LP125）。さほど例は多くないが、5 例中 4 例で、目的語に当たる人間が、「やっかいなやつ (LP122)」、「やくざめいた獣 (LP123)」、「新入りの香奈子 (LP124)」、「孕んだ嬪 (LP125)」というように描写され、明示的に否定的な意味を担っている。そのような問題を抱えた人間を他の人間に「押しつけた」側から見れば、先に L ①目的語の「抽象名詞」の項でも触れたように、責任を逃れる行為となり、責任放棄、責任転嫁の意味につながる。一方、押しつけられた側はその行為によって被害意識や心理的抵抗感を持つと考えられる。

以上、受身形「押しつけられる」の用例を四つの類型に分け、そこで表

される意味について検討した。

6. 指導の観点から

最後に、本稿の分析結果と村田（2020）の結果をまとめた上で、「押しつける」を導入する際の指導方法について提案を行いたい。

他動詞「押しつける」は、言うまでもなく、他動詞「押す」と他動詞「つける」の複合動詞である。村田（2020）の使用頻度調査では、三つのジャンルでそれぞれ自然科学系（含技術・工学）86 例、社会科学 260 例、文学 758 例、合計 1104 の用例が抽出された。すべてが語彙的複合動詞で、「つける」が習慣を意味する統語的複合動詞（例「食べつける」）の例は皆無であった。また、「～を…に／へ押しつける」構文では、対象先を表す助詞は約 97.5％が「に」であった。

語彙的複合動詞は、普通「～を…に押しつける」の構文で用いられる。力を想起させる「押す」と、密着・接着を表す「つける」から成る複合動詞「押しつける」は、「力を伴う物理的接触」の意味で用いられることが最も多い。実際、共起する副詞も、場面の具体的状況を表す擬音語、擬態語（「じゅうと」、「ギュッと」等）が多く用いられ、行為の強さ（「強く／軽く」、「きつく／ゆるく」等）や密着結果の程度を表す副詞（「ぴったりと」、「ベッタリと」等）がそれに続く。また、行為自体を強化する意味で、行為の頻度（「何回も」等）や行為範囲の全面性（「すべて」等）を表す副詞とも共起していることがわかった。

「もの」同士の場合には、「押しつける」状態は、力を伴う物理的接触の具体的描写であるが、そこに人間が関わってくると、行為者がどのような態度でその行為を行ったのか、その行為を受けた人間がどのように感じたのかという当事者の心的状況が重要となり、「押しつける」行為に対する否定的評価につながっていく。「押す」という力を伴う動作と、何かを相手に密着させる「つける」という動作が組み合わされた「押しつける」と

いう行為は、対人間の場合には、状況によって力を伴う物理的接触だけでなく、相手を威圧する行為ともなる。その行為の否定的評価は、共起する副詞にも現れている。例えば、代表的なものは「無理矢理に」、「強引に」、「一方的に」等であり、たとえ通常は肯定的な意味で使われる副詞でであっても（例「うまく」、「親しげに」）、文脈からは否定的な意味で用いられていることがわかった。また、その威圧的行為が行われる、あるいは行われた時点についても、当事者にとっては意外性や驚きなどを伴うものであることから、「いきなり」、「不意に」などの否定的な副詞と共起することが確かめられた。このように、相手に何かを押しつけ、威圧する行為は、逆に相手側にとっては心理的抵抗を持つ状態となり、その不本意さや被害意識は、受身の形でより強く表されることになる。さらに、相手の意向に関わらず、無理に何かを「押しつける」という行為は、威圧行為という意味のほかに、その行為によって、「押しつけた」当事者が、本来、自分が果たすべき責任や任務から解き放たれることを意味し、その場合には、「押しつける」行為が「責任を逃れる」という責任放棄、責任転嫁の行為の意味につながると考えられる。

以上の本研究結果を踏まえ、ここで「押しつける」の指導方法について一つの案を提示したい。学習者の学習段階は中級後半と想定する。

〈指導案〉

他動詞「押す」と他動詞「つける」の組み合わせから成る複合動詞「押しつける」は、他動詞として機能し、通常、「～を…に押しつける」という形で、目的語を対象先に「押しつける」ということを表す。基本的な意味は、力を伴う物理的接触である。その状態は、多様な擬音語、擬態語、行為の強さや密着度を表す副詞の使用によって、より具体的に描写できる。例えば「たばこを灰皿に押しつける」のように、具体物を具体物に押しつける場合もあるが、実際の用例では、目的語あるいは対象先に身体あるいは身体の一部が来ることが非常に多いので、この点にも言及する。

導入は具体名詞や具体的な場面から始める。例えば、以下の文で考えてみる。

①犯人は人質の頭に銃を押しつけた。

②［けんかの場面を想定］彼は相手の顔を地面に押しつけた。

これらの文に、先に挙げた様々な副詞を入れてみることによって、どのような場面かを確認する。なお、副詞の位置の自由度にも触れる。

①a 犯人は人質の頭にいきなり／ぐいと／強く／ぴったりと／何回も銃口を押しつけた。

②a 一郎は二郎の顔を唐突に／ぎゅっと／力強く／しっかりと／さんざん地面に押しつけた。

受身形を作り、視点の移動、所有の受身、助詞の働き（受身の「に」と「押しつける」対象先の「に」の機能の確認）に注意する。副詞を重ねることも可能である。押しつけられた側の心的状態（恐怖、屈辱）などにも目を向ける。特に身体の中で頭部が押しつけられる状態が、人としての尊厳に関わり、威圧される状態が強調されることにも気づかせる。

①b 人質は（犯人に）いきなり頭にぐいと銃口を押しつけられた。

②b 二郎は（一郎に）唐突に顔をぎゅっと地面に押しつけられた。

次に、抽象名詞の例を取り挙げる。「仕事」、「役目」などは個別の仕事、個別の役割という具体的な意味として捉えられるので、最初から「責任」、「独断」、「大義」、「戦後教育」などの抽象性が高い名詞を目的語とするよりも理解が容易になると考えられる。

③彼女は同僚に仕事を押しつけた。

④兄は弟にその役目を押しつけた。

目的語が抽象名詞の場合には、それを「押しつける」対象先である人間への威圧行為となる場合が多い。③、④の例に、行為の否定的評価や全面性を表す副詞や副詞句を入れたり、名詞に否定的な意味の形容詞を付加したりすることで、「押しつける」行為が強化されることを示す。副詞の位

置の自由度についても触れる。

③ a 彼女は無理矢理に同僚に山ほどの仕事をすべて押しつけた。

④ a 兄は強引に弟にその厄介な役目を全部押しつけた。

これらの相手への威圧行為は、見方を変えると、行為者が自分が負うべき責任から逃げる、つまり、責任放棄、責任転嫁の意味となることを説明する。

受身形を作り、視点の移動、助詞「に」の働きの確認を行い、「押しつけられた」側の心的状況についても確認する。

③ b 同僚は（彼女に）無理矢理に山ほどの仕事をすべて押しつけられた。

④ b 弟は（兄に）強引にその厄介な役目を全部押しつけられた。

心的状況の確認として、文末を「押しつけられ（て）」の形に変え、後件にその結果を書かせ、学生の理解度を確認することもできるだろう。

例　③同僚は（彼女に）無理矢理に山ほどの仕事をすべて押しつけられ、残業で終電まで帰れなかった／精神的に参ってしまった／ショックを受けた。

例　④弟は（兄に）強引にその厄介な役目を全部押しつけられて、怒って親に言いつけた／「絶対にやらない」と抵抗した／兄に泣きながら謝った。

最後に、より抽象度の高い例文を取り挙げる。目的語や対象先が省略されたり、明示されない場合もあるので、文脈からそれを推測する練習も必要となる。また、「ものが人に押しつけられる」場合、人は必ずしも個人である必要はなく、人の集合体としての組織や国家でもよい。更に、個々人の背景知識を用いることで、威圧行為を描写できることも確認する。

例　⑤政府が押しつけた政策に対して国民はデモという形で抵抗を示した。

⑥ X 国は Y 国によってキリスト教を押しつけられた。

⑦毛利家も幕府からは松平姓を押しつけられていた。

⑧平和憲法はアメリカから押しつけられた憲法なのか。

以上、実際の授業では、複合動詞「押しつける」1 語のためにそれほど多くの時間は割けないので、「押しつける」の特徴を集約して示し、その後に学習者自身に例文を作らせ、理解度を確認するという流れになると思われる。

7. おわりに

本稿では、村田（2020）に続き、文学ジャンルにおける複合動詞「押しつける」の 758 例を対象に分析を行った。村田（2020）の分析結果を踏まえ、文学ジャンルの多くの用例から、「押しつける」という語の意味の幅を探ることができた。また、それを踏まえ、指導方法の一案を提示した。言葉の意味を数多くの実例から見ていくことは、より正確な意味の理解に近づくことにつながると考えられる。今後も、個々の複合動詞の量的な分析を通じて、実際の用例に基づく指導方法を検討していきたい。

謝辞

本研究で用いたデータは、村田・山崎（2012）で抽出したデータの一部を使用しています。使用をご許可くださった大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所教授山崎誠氏に感謝の意を表します。

注

1 村田（2020）の調査で最も使用頻度が高かったのは「見つける」であった。しかし、「見つける」は既に一語化していると考えられるため、分析対象から外した。使用頻度第 2 位は「押しつける」で、分析は「押しつける」について行った。

2 村田（2020）表 1、表 2 参照。

3 ここで挙げる「～を…に／へ」の形は、比較対照を容易にするため、実際の出現時の順番を入れ替えている場合がある。例えば、「枕に耳を（押しつける）」は「耳を枕に」に変え、受身形の場合は能動形に直した場合の形を挙げている。

4 ここでは、具体名詞と抽象名詞に分けたが、一部の名詞はそれほど分類が明確にできず、文脈から判断した。例えば、「こんな仕事」、「そんな雑事」は総合的な仕事の内容と捉え、抽象名詞に含めた。また、目的語が人の場合も、例えば、「その姫たちを各大名に押しつける」、「我が子を前妻のさとへ押しつける」のような例では、その人のすべてという意味だと考え、抽象名詞に分類した。

5　可能形の 2 例を以下に挙げる。

• だが、自分のいいように作戦を考えて、我々にただ押し付けられるとは思ってくれるなよ。

• ～当局の動きを見極め、必ずや彼らに責任を押しつけられると確信できてから、～。」

6　指導時には数多くの実例が参考になるからである。ここでは、類似例や文脈から意味がわかりにくい例などは省き、154 例中 125 例を挙げた。

7　LP88 の例（「頭が脊椎の上端に押しつけられ」）では、「脊椎の上端」は人体の一部であるが、文中では「脊椎の上端」という場所を指示しているので、脊椎を「もの」と考え、類型 3 に分類した。

参考文献

渡辺実（1988）『副用語の研究』明治書院

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

矢澤真人（2000）「副詞的修飾の諸相」『日本語の文法 I 文の骨格』岩波書店

村田年・山崎誠（2012）「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向―後項動詞を指標として―」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 40 号 pp. 83–112

村田年（2020）「BCCWJ に現れた複合動詞「押しつける」―自然科学系（含技術・工学）ジャンルと社会学ジャンル―」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 48 号 pp. 31–54

辞典類

村上征勝監修（2019）『文化情報学事典』勉誠出版

三省堂（2012）『新明解国語辞典　第七版』

大修館書店（2011）『明鏡国語辞典第二版　大型版』